

人閣勳第三〇四號

起 昭和二十年一月 日
案 昭和二十年一月二日 行
裁可 昭和二十年一月二日 施
決定 昭和二十年一月二日 行

内閣總理大臣



内閣書記官長



内閣書記官



二十年一月二日

内閣書記官長

賞勳局總裁宛

申 牒

海軍大將勳一等末次信正、昭和十九年十二月二十九

内

閣

日死去ノ處同人、別紙功績調書、通多年邦
家、為ニ盡瘁シタル功績顯著ナル者ニ付特ニ
生前、功勞ヲ録セラレ賜杯、儀詮議相成度
別紙履歷書添附ス

功績調書

故内閣顧問海軍大將從二位勳一等末次信正

右者明治三十四年一月、海軍少尉ニ出身以來、累進シテ、昭和九年、海軍大將ニ任セラレ、同十二年十月豫備役仰付ケラルル迄、軍務ヲ奉マルコト三十有六年、其ノ間、第一潜水戦隊司令官、海軍省教育局長、海軍軍令部次長、舞鶴要港部司令官、第二艦隊司令長官、聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官、横須賀鎮守府司令長官、軍事參議官等ヲ歴任シ、殊ニ、ワシントン會議ニハ加藤海軍大將ノ下ニ隨員トシテ派遣セラレ、克ク全權委員ヲ輔佐シテ

内閣

其ノ職責ヲ竭シ、又、ロンドン會議ニ於ケル兵力量決定問題ニ付テハ海軍軍令部次長トシテ之レク献策ニ努ムル所アリ、又聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官ニ親補セラレ、海ノ守護リ、完璧ニ盡ス等多年、皇軍ノ進展ニ寄與シタル功績大ナルモアリ。次イデ、昭和十二年十二月近衛第一次内閣ニ内務大臣トシテ台閣ニ列シ、支那事變下ニ於ケル國務大臣トシテ重要國務ノ樞機ニ參畫シ忠誠恪勤補病ノ重責ヲ竭セシノミナラズ、所管大臣トシテ所部ノ官吏ヲ統督シ内務行政ノ運営ニ力ヲ放シタル功績亦尠カラズ。尚内閣參議ヲ仰付ラレ支那事變ニ關スル重要國務

(竹田勝)

、世奇畫ニ參與シ又内閣顧問仰付ラレテ内閣總理大臣ノ政
務運営ノ樞機ニ參シ。就モ其ノ職責ヲ盡ス等終始一貫
邦家ノ爲ニ貢獻シテ功績實ニ顯著ナリトス。

内閣

官房人機密第一號

昭和二十年一月二日

内閣總理大臣殿

海軍大臣

上奏書ノ件進達

故海軍大將末次信正ニ對スル賜杯ニ關スル別紙上奏書進達致候

(別紙上奏書添)

(終)

(花輪納)

海軍

裏面白紙

右者明治三十四年海軍出身以來軍職ニ身ヲ奉ズルコト實ニ三十七年其ノ間
海軍軍令部參謀英國大使館附武官輔佐官・海軍大學校教官・第一艦隊參謀
筑摩艦長・海軍軍令部參謀兼大學校教官・華府會議全權委員隨員第一潜水
戰隊司令官・海軍省教育局長・海軍軍令部次長・舞鶴要港部司令官・第二
艦隊司令官・聯合艦隊司令官兼第一艦隊司令官・橫須賀鎮守府司令
長官・軍事參議官・議定官等ノ要職ヲ歷任シ終始一貫奉公盡忠ノ至誠ヲ効
シ其ノ功績偉大ナリ其ノ主ナルモノヲ摘記スルニ明治四十三平夙ニ艦隊決
戰ノ根幹ハ主力艦ノ主他ニ在リ且ツ主他ノ威力發揮ハ之ガ他裝ノ劃明的様
式ニ在ルコトニ着眼シ列國ニ魁ケ主力艦主他ヲ艦體ノ中心線上ニ集中搭載
スベキヲ主張シ帝國海軍主力艦兵裝計畫ニ關シ多大ノ貢獻ヲ爲セリ又數次
ニ亘リ海軍大學校及海軍砲術學校教官ヲ拜命シ戰術思想ヲ育成統一シ其ノ
著ニ依リ學生ヲ誘掖指導シ帝國海軍高級士官ノ戰術思想ヲ育成統一シ其ノ
偉大ナル德望ト相俟ツテ後進士官ノ敬慕シテ已マザル所ナリ大正十年華府

會議ニ際シテハ全權隨員トシテ海軍自席委員ヲ佐ケ日夜倅謁國際會議場ニ
在リテ畫策適切克ク全權輔佐ニ努メタル功績ハ確メテ大ナリ昭和五年倫敦
軍縮會議ニ際シテハ海軍軍令部次長トシテ軍令部長ヲ後ケ國防用兵ノ準規
ニ基キ後多ノ困難ヲ排除シテ海軍準備ノ完璧ニ盡セル努力ト具ノ功績ハ
顯著ナリ其ノ後第二艦隊司令官及聯合艦隊司令官兼第一艦隊司令官
トシテハ上海專使直後ニ於ケル國際情勢裡ニ處シテ麾下艦隊ヲ克ク指揮掌
握シテ教育訓練ニ盡心シ艦隊將兵ノ術力ヲ擡擡ニ向上シ全世界ニ帝國艦隊
ノ嚴然タル存立ヲ顯示シテ帝國ノ時局處理ヲ有利ナラシメタル功績渺ラズ
橫須賀鎮守府司令官トシテハ現代戰鬪ノ様相ヲ察シテ出師準備ノ完璧ヲ
期シ帝國海軍ノ兵器彈藥ノ準備及補給萬般ニ關スル諸施設諸準備ノ改再増
強ニ力ヲ致シ之等ヲ整備スルト共ニ深ク術科教育ニ意ヲ用ヒ多數ノ管下各
學校ニ對シ適切ナル指導ヲ爲シタル功績顯著ナリ要之同管ハ主誠努力ヲ以
テ一貫シ終始研鑽ヲ怠ラズ明瞭セル識見ト判斷力ト正確豐富ナル智識トヲ
以テ常ニ常人ノ企圖シ得ザル所ニ着目シテ部内ノ先覺者トナリ現帝國海軍
ノ有形無形ノ實力涵養向上ニ資セル所確メテ大ナリ加フルニ同官ハ謙嚴高

潔ニシテ徳望部内ニ普ク其ノ致セル術力向上竝ニ精神振作ノ功績ハ甚ニ
拔ノモノニ有之候處今回特ニ思召ヲ以テ可然賜杯ノ恩典ニ浴セシメラレ
右謹テ奏ス

昭和二十年一月 日

海軍大臣 米内光政